

## 空を写す

妻が逝って、私は、空ばかり写していた。

その空の写真を7月7日から8月11日まで広尾のギャラリ・ヴェリタで〈空景〉展と題して亡き妻に捧げた。

7月7日は7つちがいのふたりの結婚記念日、別れても年に1度逢うことにしていた。8月11日は妻が子宮筋腫で入院した日、シキューキンシユなんて至急禁酒すりやアすぐなおつちまうよと病室で妻を笑わせて写した。それが最後の笑顔になってしまった。

8月16日手術したら子宮筋腫でなく子宮肉腫だった。いまの医学ではダメだろう、半年もつかどうかと言われた。こんなこと妻に言えなかった。

〈空景〉展は、この8月16日の日付がはいった病室からの空の写真から、5月17日妻の誕生日のバルコニーの眺めまで。写真だけでなく、ビデオ、ペインティング、シルクスクリーン、

オブジェによる〈空景〉も見せた。

1月26日の10時頃ヒゲを剃っていると、女子医大から、容態が急変したとTEL。かけつけてみると、すでに昏睡状態。なにか言葉が欲しくて、ヨーコ、ヨーコと声をかけては口もとに耳をあてた。アナタ、と言った。その後は、呼吸音だけ。泣き声のようだった。手指をにぎりしめると、にぎりかえしてきた。お互いにいつまでもはなさなかった。午前3時15分、奇跡がおこった。ヨーコが目をパツとあげた。輝いた。私はベッドにあがって、何枚も撮った。久しぶりのデュオだった。それからはしゃべりっぱなしだった。そんなにしゃべると疲れるからすこしねむって休んだらと言ったら、ねむるとさみしい、と言った。しゃべり続けた。少年の言葉になり、赤ちゃんになっていった。

へ今年1月、夫人の陽子さんを亡くした。以来「空ばかり写して」きたという氏の最近の作品群。モノクロは寂しい、と画面に特殊絵の具で極彩色を塗り、夫人の肖像を描き込んだ。荒木氏は、先月放映されたNHKのTV番組「近未来写真術」の中で、写真家として立つ契機となった作品集「センチメンタルな旅」に触れている。この作品集は、七一年に結婚した際の、ハネムーン旅行の記録だが、ここに、疲れて胎児のような姿でボートに眠る夫人の午睡の写真があ

る。この時の様子に、誕生以前の無に戻った夫人の今を重ねて氏はいう。「プロローグっていうのは、エピローグってことかな」。「輪廻するって感じは、今のあたしの気分だね」とも。今回展示されている写真が伝える、すさまじい喪失感を抱えた氏が、一枚の写真に得た救い、サトリの境地を思わせる言葉だった。(7月14日『朝日新聞』夕刊)

死にぎわに、顔をなんどもなんども横にふった。イヤ、イヤ、死ぬのイヤ。'90年1月27日午前11時に、ヨーコは逝ってしまった。

マーラーの〈亡き子をしのぶ歌〉でのビデオ作品を観るたびに私は涙ぐんだ。5月17日のチロ(愛猫)が午睡してるバルコニーの写真にペインティングしたヨーコの目にも涙がたまり、流れた。

ヨーコが愛用してたパン切り台に自画像をペインティングした。髪の毛は陰毛を切りとってくつつけ、ヨーコの着物の帯ひもで首を吊った。オブジェへ妻が逝って、首吊り自殺したA

'90年7月7日

まだ私は、  
空を写している。

